衆議院議員・防災士　**柿沢 未途**

西日本豪雨水害被災地レポート

視察日　２０１８年7月１５、１６日

ボランティアが熱中症で救急搬送されている！

＜岡山県倉敷市真備町＞

まるで東北の津波被災地です。３．１１と全く同じ光景が広がっていました。
岡山県倉敷市真備町。

西日本豪雨水害、河川堤防の決壊による集落全体の水没は、想像を絶する壊滅的な被害を浸水地域にもたらしていました。外気温３８℃の酷暑の中、水没家屋の片付けが住民とボランティアの手で行なわれており、それにともなって、湿った畳や家財道具等、膨大な量の災害廃棄物が山のように積み上がっていました。
３．１１と同じニオイと、乾いた泥による土ぼこりが、辺り一面にたちこめています。

倉敷市真備町を訪れたのは、江東区から移住した、佐々木正広さんご夫妻が被災されたとの報を聞いたからです。白河３丁目町会の役員だった佐々木さんは２年前に倉敷市に移住しました。移住先に岡山県を選んだのは「災害がない」というのが理由だったそうです。まさかそこで水害に遭い、被災者となってしまうとは。

佐々木さんご夫妻が避難している吉備路クリーンセンター。高台にある廃棄物焼却施設です。東京からの移住者である佐々木さんご夫妻は、堤防決壊による増水にもなすすべを知らず、お隣りの家のおばあちゃんに扉を叩かれ、ドンドンドン、逃げるわよ、と声をかけられ、猛烈な雨の中を、着のみ着のまま、高台のクリーンセンターまで車で逃げてきたそうです。その時にペットのワンちゃんを置いてきてしまったのをとても悔やんでいました。

水没したご自宅も見せてもらいました。１階は水没して中は泥まみれのメチャメチャです。天井の梁まで湿ってしまい、木が腐ってしまうので、もう使い物にならないとの事でした。念願の田舎暮らしを始めてたった２年でこんな風になってしまいました。お気の毒で言葉もありません。

玄関の前には、外に出した家財道具や片付けたゴミが積み上がっています。泥まみれで横になっているタンスのようなものが仏壇です。息子さんが東京から来て片付けをしてくれましたが、移住者は近くに身寄り頼りがないので、助けの手が得られずに苦労しています。市役所のサポートもなかなか得られません。「全壊」の判定は出たものの、生活再建の見通しもまだまだこれからです

限られた時間でしたが、避難所にも足を運びました。
安倍総理も訪問した岡田小学校、そして薗小学校の２か所を駆け足で回りました。水没で家を失った被災者の方々が、体育館や教室で避難生活を送っています。段ボールベッドが入り、エアコンが入り、過酷な暑さの中ですが、３．１１と比べれば、それなりに生活は安定しつつあるようにも見えました。避難所の運営スタッフには東京都の派遣職員が何人もいました。医療スタッフはじめ、外からの支援の手も、かなり入っているように見えました。

薗小学校には、かねてから長いお付き合いの菅原由美さんのボランティアナースの会・キャンナスの皆さんが常駐しておられます。ピンクＴシャツのキャンナスの看護師さんをつかまえて、避難所の状況をお聞きしましたが、課題として、以下のような話がありました。
・子どもの泣き声を気にして、子連れの親子が気兼ねして車中泊を選ばれるケースがある。避難者の皆さんもナーバスになっているので、お互いがストレスなく共存できるよう、託児所の開設が必要かもしれない。
・昨日だけで１２００人のボランティアが入っているが、熱中症による倉敷市内の救急搬送３０件のうち半数以上がボランティア。せっかく来て頂いたボランティアの皆さんが熱中症でバタバタ倒れる事態になりかかっている。最も暑い時間帯に作業しているのも問題だし、その時間帯に作業するのなら、熱中症を防ぐため、水分と塩分の補給を確実に行なってもらわないと危ない。

訪問した当日も外気温３８℃という過酷な暑さで、被災者の皆さん、ボランティアの皆さんの健康状態が気がかりです。最も暑くなるお昼の時間帯を避け、早朝と夕方に作業時間を限定すべき！生命にかかわる事態が起きてからでは手遅れ！と、キャンナス創設者の菅原由美さんからも悲鳴のような声をお電話で頂きました。

それにしても、避難所で話を聞いた誰もが、「災害のないと言われる岡山県に住んでいて、こんな目に遭うとは思ってもいなかった」と異口同音に言っておられました。それほど「想定外」の事態だったのでしょう。佐々木さんご夫妻のように、それゆえに移住してくる方がいるぐらいなのですから。

どこにいても災害リスクとは無縁でいられない、日本列島はそういうところなのだと、改めて痛感します。

トイレ問題の解決に奔走！

＜広島県呉市・坂町＞

道路の寸断と断水が残る呉市で、半島の南端の高齢者福祉施設をはじめ、隅から隅までを回って、自動ラップ式トイレ「ラップポン」の説明と設置を行ないました。

呉市の南端の海沿いにある高齢者福祉施設。一昨日まで断水で、湧き水をホースで引っ張ってきて、洗濯とかに使っていたと。入所者６９人のトイレはポータブルトイレで、溜まった汚物は人の手で捨て、そのつど、洗って使っていたと。断水がもっと長期になっていたら、衛生的に問題が生じていたかもしれません。
「ラップポン」のデモンストレーションで、施設職員さんも感激した様子でした。
ラップで密閉された汚物は、可燃ゴミとして出す事ができて、仮に被災地でゴミ出しができなくても、夏場に１ヵ月間、置いていても、ニオイも大調査も外に漏れません。水は使わず、電気は車のシガーソケットからも取る事ができます。もともとは介護用に開発されたものですが、「ラップポン」は災害用トイレの革命だと私は思っています。

災害時に最も深刻なのがトイレの問題です。工事現場のような仮設トイレが避難所に設置されますが、満杯になるともう使えません。汲み取りが来ないまま放置されると衛生的にも問題があり、そこから感染症が発生をする原因にもなりかねません。２０年以上前の阪神大震災の頃から言われているのに、なかなか改善されません。長年の課題であった災害時のトイレ問題を解決できるのが、この「ラップポン」というスグレモノです。

３．１１の時に石巻赤十字病院で災害医療コーディネーターとして陣頭指揮をとっていた石井正医師から教えてもらい、被災地の避難所の劣悪なトイレ事情の改善のため、「ラップポン」の普及に奔走しました。国会質問でも取り上げました。日本財団が支援を決め、熊本地震の際は益城町の避難所に設置され、「安心してトイレができる」と被災者に喜ばれました。今回も日本財団が支援を決め、被災地へ提供される事となりました。

今回の西日本豪雨水害の被災地の特徴は、避難所には人がいらず、ほとんどの方々が自宅に戻っておられる事です。家屋が水没したり土砂に埋まったりした方々は避難所生活をしていますが、それ以外の方々は、電気もつくし、自宅に戻って生活しておられるのが大多数となっています。

水についても、自衛隊や水道局の給水車が巡回しており、自宅での生活で必要となる飲み水や生活用水といった最低限の給水は受けられています。だから断水地区でも自宅で生活ができるのです。

ただ、トイレを流す水となると、そうはいきません。ペットボトル２、３本ぐらいの給水では、トイレを流す事はできません。そのため、「ご自宅にいてトイレに困っている方々が多い」「わざわざ遠くの避難所まで行って用を足している」との情報が、呉市役所に次々と寄せられるようになりました。

水を使わない、自動ラップ式トイレ「ラップポン」があれば、断水地区でも安心して用を足す事ができます。そこで断水地区の集落の公民館や集会所に「ラップポン」を設置して、付近の住民の皆さんに使ってもらう、というオペレーションを始める事となりました。断水が続いてきた川尻地区で、集落単位のニーズ調査を呉市役所の担当者が進め、断水地区の７か所の公民館や集会所に、計２１台が設置される事となりました。

前日には、仁方地区の戸田という集落の自治会長さんにかけ合って、自治会館に試験的に設置させてもらっていました。自治会長の白井為典さんは、災害ボランティアの研修修了者で、トイレ問題の重要性の理解が速く、即断即決で自治会館への設置が決まりました。これが翌日以降の呉市役所での「ラップポン」オペレーションのきっかけとなりました。

山肌の斜面に９７世帯が住んでいる戸田の集落。８０代以上のお年寄りが大半です。それでも、道路寸断による孤立を自力で解消しようと、白井さんの防災無線の呼びかけで集まった地元の方々１００人が、炎天下、スコップ片手に泥かきして、寸断された道路を切り開いたそうです。行政の力を借りずに孤立状態を解消した戸田の皆さんの「自助努力」は、マスコミにも大きく取り上げられました。自治会長さんのリーダーシップで、集落の住民全体の生命や安全が守られるかどうかが決まるものだと、つくづく感じました。

お隣りの坂町でも、土砂災害の甚大な被害を受けた小屋浦地区で水道の復旧に時間がかかりそうで、同様のオペレーションが必要となる可燃性があります。異常なほどの高温の暑さなので、トイレの不備による感染症の発生が、夏場の大きなリスクとなりかねません。

吉田隆行町長と話しましたが、坂町は山から流れ出す土砂とすさまじい雨で町全体が水没する被害に見舞われ、水が引いた後の濁った土砂まじりの水が乾いて、土ぼこりとニオイを発しており、真夏に向けて衛生面での課題があると語っていました。

夜は呉市の安浦地区の避難所で、避難している方々の生活状況をお聞きしました。段ボールベッドも入り、避難所生活は落ち着いていますが、今、避難所にいる方々は水害で自宅がメチャメチャになっている方々なので、昼間、暑い中、自宅に足を運んで、あまりの惨状を目の当たりにして帰ってきて、皆さん一様に、打ちひしがれていました。水没で家財道具が一切合財ダメになり、何もかも失ってしまった男性に、自宅の惨状をスマホの写真で見せてもらいましたが、かける言葉がありませんでした。

酷暑の中での荒れ果てたわが家の片付けに、疲弊の色も濃くなっています。ボランティアも足りず、ボランティアセンターを運営する社会福祉協議会の職員も、不眠不休で疲れ切っていました。ますます暑さの厳しくなる中、体調管理に気をつけながらの復旧活動が必要となります。